

【第三回】

さんびつ

三筆

——空海を中心に——

三筆

● 空海
(七七四～八三五年)

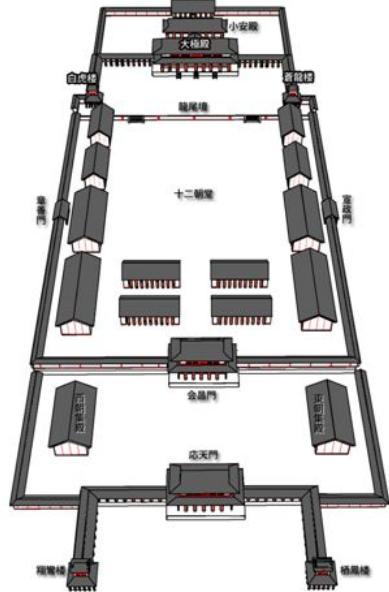


● 嵐峨天皇 (七八六～八四二年)

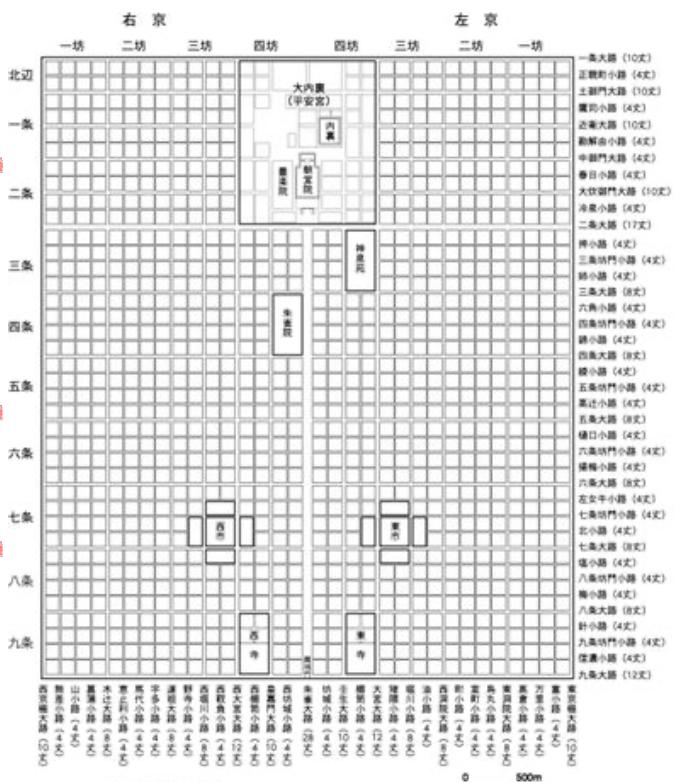
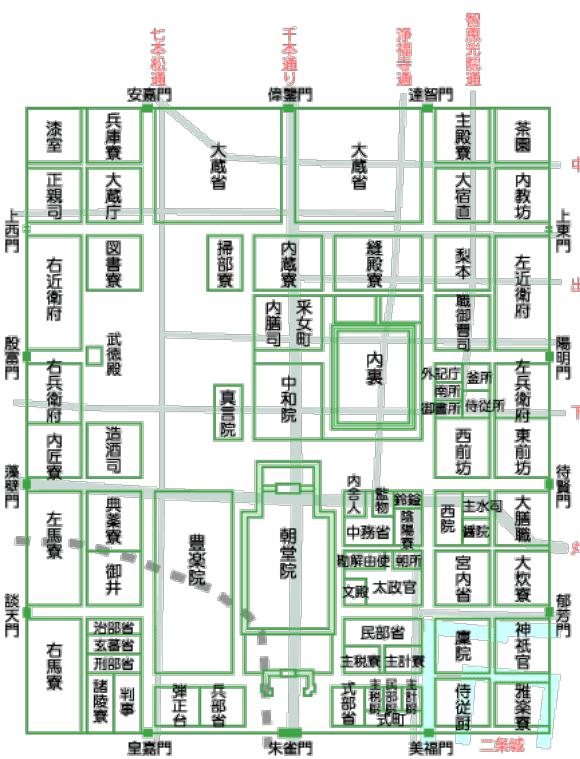


● 橘逸勢
(?～八四二年)





長安城



著作：山田勝之

著作：山田明

1/1万

年表

七八五（延暦4）	藤原種繼暗殺事件 最澄比叡山に登る。 ふじわらのたねうぶ とる。 かづのう
七八六（延暦5）	嵯峨天皇誕生 さがめうじゆうせい
七八八（延暦7）	比叡山延暦寺開山 ひきやまえんりくじ ひらく
七九四（延暦13）	平安京遷都 最澄「内供奉十禪師」 ないぐふじゅうせんし
五八一 隋建国	すい
六〇七 第一次遣隋使（小野妹子）	けんすいし いもこ
六一八 唐建国	とうこく
六一九 隋滅亡	隋滅亡
六二九 玄奘三藏出国	げんじやうさんぞう
六三〇 第一次遣唐使	たいか かいしん
六四五 大化の革新始まる。	だいかのけいせうしはじまる
六六〇 玄奘インドより帰国。	げんじやう インドよりかきくに
六六八 高句麗滅亡	こうくりめいじやう
六六三 白村江の戦い（日本最初の国際戦争）	しらむらこうのたたか（にほんさいしょのこくさいせうじゆう）
六六八 百濟滅亡	はくざいめいじやう
六七二 壬申の乱	ねんしんのらん
六七三 天武天皇即位	てんむてんのうそくい
六七六 新羅朝鮮半島統一	しんらじょうせんはんとうとういつ
七〇一（大宝元） 大宝律令完成	だいほうりつりょうせい
七一〇（和銅3） 平城京遷都	わいじょうきょうせんと
七三七（天平9） 桓武天皇誕生	てんびょう かんむ
七四五（天平17） 不空の新譯経典	しんいつうきょうてん
七五九（天平19） 二の頃「万葉集」成立	このごろ「まんげつしゅつ」せいり
七六五（天平21） 道鏡太政大臣禪師となる。	どうきょうたいぜいたんしんぜん
七六七（天平22） 最澄誕生	さいとううじゆうせい
七七四（宝亀5） 空海誕生	くうかいうじゆうせい
七七八（宝亀9） 最澄出家（十二歳）	さいとうしゆっしやく（じゅうにさい）
七八一（天応元） 桓武天皇即位	かんむ
七八四（延暦3） 長岡京遷都	ながおかきょうせんと
八〇四（延暦23） 橋逸勢入唐	はしゆせいせい いりとう
八〇五（延暦24） 六月最澄帰国	六月最澄帰国
八〇六（大同元） 十月空海・逸勢帰国（空海は大宰府に滞在）	十月空海・逸勢帰国（空海はだざいふに とどまつて）
八〇九（大同4） 平城天皇退位して嵯峨天皇即位	平城天皇退位して嵯峨天皇即位
八一〇（弘仁元） 空海七月入京し高雄山寺（神護寺）に入る。	空海七月入京し高雄山寺（神護寺）に入る。
八一二（弘仁13） 「薬子の変」	「やくしのへん」
八一六（弘仁7） 真言宗を開創	しんげんしゅうをかいぞう
八二三（弘仁14） 最澄没	さいとうめつ
八二三（弘仁14） 嵯峨天皇讓位し淳和天皇即位	さがめうじゆうとうめい し じゅんわてんのうそくい
八二八（天長5） 空海、東寺（教王護国寺）を賜る。	くうかい、とうじ（きょうおうごこくじ）をめぐらす
八三三（天長10） 空海、綜芸種智院開設	くうかい、そうげいしゅうぢいん かいせき
八二八（天長5） 空海、東寺（教王護国寺）を賜る。	くうかい、とうじ（きょうおうごこくじ）をめぐらす
八三五（承和2） 空海入定	くうかいにゅうじやう
八三八（承和5） 第一七次遣唐使（八三九帰国）	だいいちしちじ けんとうし（はいきゅうこく）
八四〇（承和7） 淳和天皇没	じゅんわてんのうめつ
八四一（承和9） 「承和の変」七月十五日嵯峨上皇没	「じょうわのへん」 しゅうがつじゅうごにち さがめうじゆうめつ
八九四（寛平6） 遣唐使廃止	けんとうしはいし
九〇一（昌泰4） 「昌泰の変」	「まつたいのへん」
九〇五（延喜5） 「古今和歌集」	こきんわげいし
九〇七 唐滅亡	とうめいじやう



云 差我天皇李喬泳浅巻 (郭子)

寧知歸玉力攀援
銅馳馬翠洛鉤留
燕檄三千里青橋十二重
開產似雪全心馬如飴
日中衛士是樽更漏
曾收綠舟經相宗全紫微
三山巨麓浦方里之勝光
寫春雪色珠含明月輝
半溪霧露方逐衆川流
日夕三江空靈湖万里迴流
律錦浪動日浦珠光開浦
仙黃牛玉濤也白馬玉羨
也僕士詣識卿雲才
何出蘿菴中長は接漢室
桃花生玉蘿也箭入龍宮
桃山千羊霞夢光玉色也
若枝蘭葉捨還休玉皇風
九流龍光猶三川物佐新也
明月風涌月映玉難珠光也
期仙密陳玉觀簾人玉處
分錫端係字仰差臻

26.2×235.1 cm

(郭子)

寫春雪色珠
半溪霧露方
寫春雪色珠
半溪霧露方

習坎疎丹壑 朝宗合紫微
三山巨鼈踊 萬里大鵬飛
樓寫春雲色 珠含明月輝
會當添霧露 方逐衆川歸

霧

歐陽詢

當添霧露方

盈具辰宿列張寒來暑注
秋收冬藏閏餘歲歲律名
調陽雲騰致雨露結為霜

料紙は縦簾紙。白麻紙。
唐の詩人李嶠（六四四～七一二年）の詩集
「李嶠雜詠」を行書で書写した巻物。

奈良時代から歐陽詢とその子歐陽通の系統の書が学ばれた。空海も歐陽詢の法帖を請來した。この作品は歐陽詢の影響の強い作品である。

嵯峨天皇筆 光定戒牒（部分）（八二三年）

（ほぼ原寸）

軌範

料紙は縦簾紙。白麻紙。

空海の書の影響が大きい。

比叡山の戒壇設立に功績のあつた最澄の弟子光定の戒牒（受戒を証明する文章）に筆を執つた一巻。

弘仁十四年四月十四日
比叡峰延暦寺一承止
戒院受菩薩大戒
空海慈悲校済謹和南疏

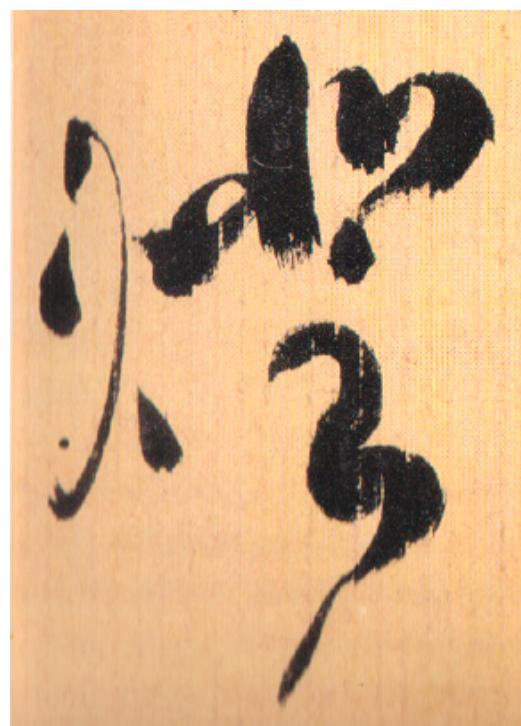
36.9×148.1 cm

竊以無明長夜戒光為炬滅
後軌範木叉為師所為滅
傳以文牒鑿於玉函也
沙門顯鶴採於死後故
能三觀法乘結三身於究
竟三種淨戒開三因於
初發但光定宿因多
幸得遇勝緣弃妄尋
真精研戒品庶使無上
佛種發得最崇塵勞
樹林因緣殊滅今契
弘仁十四年四月十四日於
比叡峰延暦寺一承止
戒院受菩薩大戒
空海慈悲校済謹和南疏

弘仁十四年四月十四日
比叡峰延暦寺一承止
戒院受菩薩大戒
空海慈悲校済謹和南疏

37.3×80.2 cm

哭澄上人
呼嗟雙樹下、撲化契如々。惠遠
名猶駐、支公業已虛。草深新
廟塔、松掩旧禪居。燈焰殘空座、香煙繞像爐。蒼生橋梁少、縕侶律儀疎。
法體何久住。塵心傷有余。



燈

哭澄上人詩 (澄上人を哭するの詩)
最澄の死を悼む詩。一二句、五言排
律。料紙は縦簾紙。空海の雑体書の影
響が大きい。

哭澄上人
呼嗟雙樹下、撲化契如々。惠遠
名猶駐、支公業已虛。草深新
廟塔、松掩旧禪居。燈焰殘空座、香煙繞像爐。蒼生橋梁少、縕侶律儀疎。
法體何久住。塵心傷有余。

ほぼ原寸



心傷有余



帷子辻 『絵本百物語』 竹原春泉画

嵯峨天皇の皇后たちばなのかちこ 嘉智子だんりんこうじう。
橘逸勢は従兄弟。

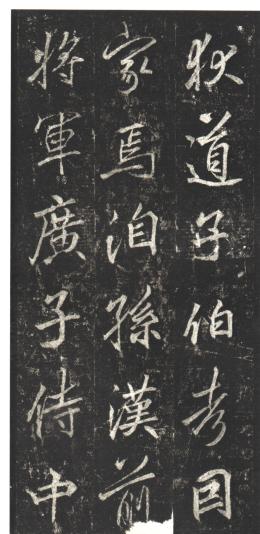
死後遺体を犬やカラスの餌にするため辻に放置させ、その様子を絵師に書かせたといわれる。帷子の辻のあたりか。帷子ノ辻より西を化野とよび、魔界といわれた。

伝橋逸勢 伊都内親王願文 (部分) (八三三)

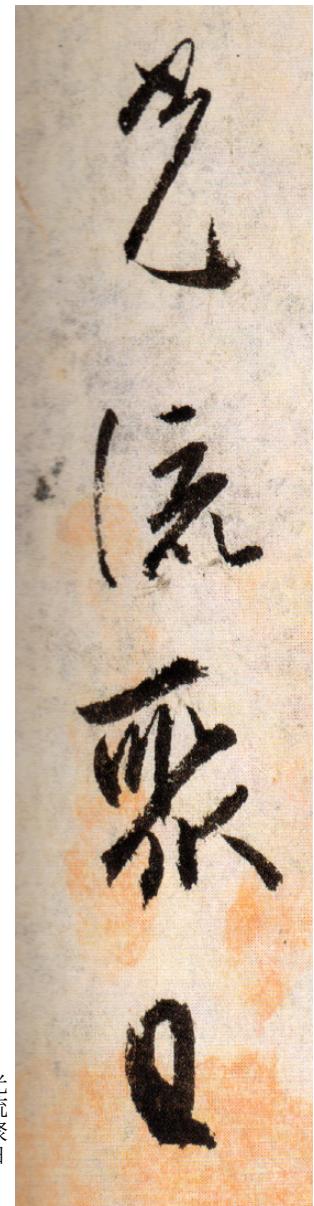
菩薩戒弟子從五位下藤原朝臣平子稽首和南。

奉納山階寺東院西堂香燈誦經料事。

氣



李思訓碑



光流聚日

ほぼ原寸

楷行草書の各体を用いている。

空海との共通性、個性への動き。

伊都内親王は桓武天皇第八皇女
（ありわらなりひら）
で、在原業平の母。

興福寺東院西堂に墾田十六丁ほ

かを寄進した。そのときの願文。

王羲之、唐代の書の影響。

六朝の古法（王法）と唐の新しい

文化との融合。

空海との共通性、個性への動き。

伊都内親王は桓武天皇第八皇女

（ありわらなりひら）
で、在原業平の母。

興福寺東院西堂に墾田十六丁ほ

かを寄進した。そのときの願文。

楷行草書の各体を用いている。

鶯聲指歸下卷
并序

鶯毛先生論
處士隱士論
假名乞此論
觀無常賦
生死海賦

夫列隱條並注虎爾累
雨雪霏霏侍兔雜是以翻
丹鳳羽水有由腕上赤
龍感像來格是故詩人或
倍宴樂以奏娛意或懷惠
吟而賦憂以視賢能以馳
褒讚恩懸而雅議篤生
人有工拙詞有妍媸曹達之
詩未免與齡沈休之筆相

覽尊園穿初通華
深深關海慈厚深
焚籠悲普四生類
恤約一子衆誇他事
焉蒸勵已兼征功汎
盤船以度者乘拔車
雨空經津湘寥覺悲
濁冰塵夢雨歸非
殊更不為塞融廣
矣擾輩遠仰山
如宮

鶯聲指歸下卷

鶯聲

鶯聲

『三教指帰』(儒・道・仏の教えがおもむくところを示す)

卷の上 併せて序

卷の上 亀毛先生の論 一首

文章が起ころには必ずわけがある。

天は晴れると気象をあらわし、人は感じると筆を執る。『八卦』の伏羲、『道德經』の老子、『詩經』の孔子、『楚辭』の屈原も心に感じたから紙に書いたのである。

凡人と聖人とでは生まれを異にし、昔と今とでは時代を異にするというが、人が憤りを写(吐)くのにどうして経験をいわないでよからうか。

われは十五のとき、母の兄で従五位下の学者阿刀氏に師事し、教えを守り、学徳を仰ぎ求めた。

十八のとき、大学に遊学した。

螢の光や雪の明かりで学んだ車胤や孫康のように怠惰に打ち勝ち、繩を首にかけたり錐で股を突いたりして眠気を覚ました孫敬や蘇秦のように勤め励まないのを怒つた。

ここに、一人の沙門_{しゃもん}がいた。われに『虚空藏求聞持法』を示し、その經を説いたのである。「もし人が法によってこの真言を百万遍となえれば、ただちに一切の教えの意味を暗記することができる」と。

そこで、大聖人仏陀の誠言を信じて木の棒で火を熾_{おこ}すような苦行を望んだのである。

阿波の国は大滝の岳に登り、土佐の国は室戸の崎で励み唱えた。

谷はこだまを惜しむことなく、明星は輝いてわれを迎え、遂には、「名を争うものは朝廷においてなし、利を争うものは市場においてなす」といった榮華を瞬時に厭いしりぞけ、山野の暮らしを朝夕ねがうようになつたのである。

軽くて暖かい狐の毛皮を着た人や肥えて美しい馬に乗つた人をみては稻光のようにはかないのちを嘆き、体の不自由な人やボロを着た人みては因果応報を悲しむ思いが休みなくわきあがつて来、目に触れるものがわれを仏へと勧めたのである。

誰が風をつなぎ止めることができようか。

ここに数人の親しい知り合いがいて、われを五常(仁・義・礼・智・信)の縄で縛り、われを断念さすの忠孝に背くというのである。

われは思うのである。物の心は一つではない。鳥や魚も心は違う。そのため、天子は人を驅り立てるのに三種の

教えの網をつかう。言うところの、釈迦と老子と孔子である。

亀毛先生はうまれつき弁舌がさわやかで、姿かたちも大きく立派であった。

中国のあらゆる古典に習熟し、太古の帝王や八卦についても多くを暗記していた。口を少し開けば枯れ木に花が咲き、一言わずかにしやべれば骸骨も肉をつけるといつた調子で、弁舌で有名な蘇秦や晏平も彼と向かい合えば舌を巻き、張儀や郭象も遠くから見ただけで声を呑むほどの雄弁家だった。

卷の中 虚亡隱士の論

虚亡隱士は先ほどから彼らの座席の側にいて愚者を装い、知恵を隠し、和光同塵といつた面持ちでいた。ばさばさの蓬髮_{ほうはつ}は登徒子の妻をこえ、ボロの綿入れは仙人の董威_{とうせき}以上だつた。足を投げ出し、傲然と座つていたが、につこり笑つて唇を広げ、頬をゆるめ、上目使いに「ああ違うんだなあ、貴公らの薬の与え方は」と、いつた。

三教指帰 卷の下 仮名乞兒の論
おもいをはくの頌

無常を観るの賦

生死海の賦

三教を詠う詩(十韻の詩)

仮名乞兒_{おもいをはく}という者がいた。どういう人であるかはよくわからない。草葺きの家に生まれて貧しさの中で育ち、俗世を捨てて仏の教えを仰ぎ、苦行していることだけは確かである。

黒髪を剃り落として頭は銅_{あかがね}の瓶_{かめ}のように艶々しているが、色艶はすべて失せて金属を溶かす坩堝_{るつぼ}のようになかなかさしている。姿_{すがたからだ}形は瘦せこけて体は小さく、長い脚は骨張つて池の端の鷺の脚のようであり、すぐめた首は皮膚が輪をなして泥の中の亀の首に似ていた。

「今まさに、儒・道・仏三教を明かにして、十韻の詩を汝らの俗謡に換える」と。

そこで詩を作つていつた。

十韻の詩

